

## 論文番号 80

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Health-Associated Changes in Drinking; A Period Prevalence Study of Atherosclerosis Risk in Communities (ARIC) Cohort (1987-1995)

健康状態による飲酒習慣の変化：ARIC スタディーでの期間有病率研究

執筆者

Eigenbrodt ML, et al

掲載誌 (番号又は発行年月日)

Preventive Medicine 31,81-89, 2000

キーワード

アルコール摂取、飲酒習慣、健康状態、

要旨

(背景) 幾人かの研究者は、禁酒は健康状態を害したためにおこることを指摘しており、事実ならアルコールのリスクや効用に関する研究にバイアスを与える可能性がある。

(方法) 初回の ARIC の調査時 (1987-1989 年) に、飲酒習慣と健康状態 (医師に指摘された慢性疾患の有無と自覚的健康状態) に関する調査を実施した。ARIC の 3 回目の調査時 (1993-1995) に同一の対象者に同じ調査を実施して 6 年間の推移をみた。対象者はヨーロッパ系、アフリカ系の合計 12,562 人、45-64 歳の男女である (ベースライン時点)。

(結果) 2,860 人は 3 回目の調査を受けなかったので分析から除外された。ベースライン時の飲酒者のうち、飲酒回数が週 1 回未満になった者の割合は、追跡終了時点で慢性疾患を有する者で 31.5%、有さない者で 23%であった。この割合は自覚的健康状態が良いものと悪いものでは各々 45%と 25.2%となった。逆にベースライン時の非飲酒者のうち、飲酒回数が週 1 回以上になった者の割合は、追跡終了時点で慢性疾患を有する者で 6.6%、有さない者で 7.5%であった。この割合は自覚的健康状態の良い者と悪い者では各々 6.0%と 7.0%であった。人種別にみると年齢、学歴、地域、収入をロジスティック回帰モデルで調整した場合、ヨーロッパ系の女性で自覚的健康状態を用いた場合のオッズ比が最も大きかった。飲酒量区分別に推移を見ると、中間の飲酒区分 (70-140g/週) で健康状態の低下と禁酒の関連が最も強かった。

(考察) 禁酒者を含む非飲酒群は飲酒群に比べて不健康な集団である。生涯非飲酒者を基準群とした場合も、生涯飲酒者は健康状態が悪化しても飲酒習慣が変わらないため、やはり飲酒群と比べて不健康な集団になる可能性を秘めている。これらは飲酒の効用を過剰評価する原因となる。また中間飲酒量区分で健康状態の低下と禁酒の関連が最も強いことから、少量飲酒群を基準として死亡率等の解析を行うと、中間飲酒群を実際より良く評価してしまう可能性がある。